

第四卷 發願利生

菩提心を發すというは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設け在家にもあれ、設け出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度佗の心を發すべし。其形陋しといふとも、此心を發せば、己に一切衆生の導師なり、設け七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ仏道極妙の法則なり。若し菩提心を發して後、六趣四生に輪転すと雖も、其輪転の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば從來の光陰は設け空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて發願すべし、設け仏に成るべき功德熟して円満すべしといふとも、尚

お廻らして衆生の成仏得道に回向するなり、
或は無量劫行いて衆生を先に度して自からは
終に仏に成らず、但し衆生を度し衆生を利益
するもあり。衆生を利益すというは四枚の般
若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四
者同事、是れ則ち薩埵の行願なり、其布施と
いうは貪らざるなり、我物に非ざれども布施
を障えざる道理あり、其物の軽きを嫌わず、
其功の実なるべきなり、然あれば則ち一句一
偈の法をも布施すべし、此生佗生の善種とな
る、一銭一草の財をも布施すべし、此世佗世
の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なる
べし、但彼が報謝を貪らず、自からが力を頒
つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり
治生産業固より布施に非ざること無し。愛語
というは、衆生を見るに、先ず慈愛の心を発
し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤

子の懐おもいを貯たくわえて言語ごんごするは愛語あいごなり、徳とくあるは讚ほむべし、徳とくなきは憐あわれむべし、怨敵えんてきを降こう伏ぶくし、君子くんしを和睦わぼくならしむること愛語あいごを根本こんぽんとするなり、面むかいて愛語あいごを聞きくは面おもてを喜よろこばしめ、心こころを楽たのしくす、面むかわずして愛語あいごを聞きくは肝きもに銘めいじ魂たましに銘めいず、愛語あいご能よく廻かいてん天てんの力ちからあることを学がくすべきなり。利行りぎょうというは貴賤きせんの衆生しゅじょうに於おきて利益りやくの善巧ぜんぎょうを廻めぐらすなり、窮きゆう龜きを見み病雀びやうじやくを見みしとき、彼かれが報謝ほうしゃを求もとめず、唯ただ単ひとえに利行りぎょうに催もよおさるるなり、愚人ぐにん謂おもわくは利り佗たを先さきとせば自みずからが利省りはかれぬべしと、爾しかには非あらざるなり、利行りぎょうは一法いっぽうなり、普あまねく自じ佗たを利りするなり。同どう事じというは不違ふいなり、自じにも不違ふいなり、佗たにも不違ふいなり、譬たとえば人にん間げんの如に来らいは人にん間げんに同どうぜるが如ごとし、佗たをして自じに同どうぜしめて後のちに自じをして佗たに同どうぜしむる道理どうりあるべし、自じ佗たは時ときに随したがうて無窮むきゆうなり、海うみの水みづを

辞じせざるは同どう事じなり、是この故ゆえに能よく水みず聚あまりて海うみ
となるなり。大おお凡よそ菩ぼ提だい心しんの行ぎょう願がんには是かくの如ごとく
の道どう理り静しずかに思し惟ゆいすべし、卒そつ爾じにすること勿なか
れ、濟さい度ど摂しょう受じゆに一切いつさい衆しゆ生じよう皆みな化けを被こうぶらん功く徳どく
を礼らい拜はい恭こう敬ぎようすべし。